

# トランスジェンダー

## をいきる

### (4)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

## 牛若孝治

### 小学生(1)侵襲的介入への嫌悪

これから数回にわたって、小学生時代のエピソード分析を記述する。第1回目は、現在でも自己の課題として残されている、主に女性たちからの侵襲的介入に対する嫌悪、その元になっている「世話焼き」、「おせっかい」そして「優しさが怖い」という現象について記述する。

#### 1 盲学校で体験した「女性の園」

私は幼稚園から鍼灸マッサージ師の資格を取得するまでのやく17年間、盲学校（現在の視覚特別支援学校）で教育を受けた。盲学校の児童・生徒は圧倒的に男子が多かったにも関わらず、ジェンダーが男である私の周囲には、右を向いても左を向いても、前を向いても後ろを向いても、そして上を向いても下を向いても圧倒的に女性が多かった。小学生のころから、一貫して一クラスの人数が一桁台と少なかった上に、クラスのメンバーはほとんどが女子ばかり、たまに男子と同じクラスになっても、なんらかの事情で女子ばかりになってしまった、という状況下、担任も女性教師が多かった。このような環境の下で、私は自己の位置取りを確保するのが難しかった。すなわち、ジェンダーが男である私にとっては当に、女の園の中に、男が一人混じっているような、また、身体が女性であるという

だけで、自己の意思とは無関係に、女の園の中に無理やり押し込められたような心理状態に置かれた。担任の女性教師によってしばしば女の子としての礼儀作法やジェンダー役割を強制されたため、自己の男性性が崩壊されそうな危機に追い込まれることが多かった。

だが、そのような「女の園」の中で、いつも冷ややかに過ごすことで、かろうじて自己の崩壊されそうな不安定な男性性を何とか保持するすべを見つけた。すなわち、泣いているクラスメートの女の子をなだめようとしない、自分が担任の女性教師から叱責されていても、他人事として理解し、直接応答をしない、怒りっぽい口調で寡黙になることで、事故の感情を封印する、特に小学校1、2年当時、盲学校の近くで祖母と下宿していたときは、祖母の厳しい言いつけを守り、学業を遂行することで、祖母の自慢の「孝行息子」を演じる、といった方法で、「女性の園」との距離をとり続けてきた。その結果、担任の女性教師たちからは、「友達への同情や思いやりが薄い」、「自分の感情を言葉にするのが乏しい」「女の子としての可愛気がない」という評価が下され、通知表に記された。

このような評価は、一見残酷のように思われるが、当時の私にしてみれば、たとえ不安定な男性性ではあっても、その男性性を一定の水準にまで引き上げた、という達成感があったのかもしれない。そのような意味で、女性教師たちからのこのような評価は、私にとってはむしろ「高評」ですらあったといえるだろう。

## 2 三つの侵襲的介入

小学校3年生から中学校1年生にかけて、盲学校の寄宿舎に入射していた。ジェンダーが男であるとはいえ、身体が女性であるため、女子寮に入れられたのは当然である。園分、「女の園」はいっそう拡大した。

祖母を始め、小学校の担任の教師や寄宿舎の寮母など、私の周りには、世話焼きでおせっかいという侵襲的な介入によるコミュニケーションを図ろうとする女性たちが多かった。この侵襲的な介入には、以下の三つのタイプがあった。

### ①学業向上を目的とした侵襲的介入

このタイプは、主に担任の教師による学業向上を目的としたかかわり方で、学業を基調としている。したがって、侵襲的な介入の中では、まだ軽度である。そこには、学業という業績構築に関わる要素を含んでいるので、その学業成績を上げるための侵襲的介入はやむを得ないという自己の中の了解可能性によって苦痛を軽減させたといえるだろう。また、一定のまたはそれ以上の学業成績を収めた場合や、表彰状を授与された場合などは、そのことが男の勲章と化して結果をもたらした、という意味で、ジェンダーが男の私の心中を満足させていた。したがって、少々過干渉的な侵襲的介入であっても、結果さえ出せば男性性のランクを向上することができるなら、それに越したことはない、という了解の仕方、この侵襲的介入を自ら積極的に受け入れた、と言い換えてもいいだろう。

### ②QOL向上を目的とした侵襲的介入

このタイプは、小学校3年生から中学校1年生まで入舎していた盲学校の寄宿舎の寮母のかかわり方で、日常生活の質を向上させることを貴重としている。このかかわり方には、家族から引き離されて入舎している私たちの寂しさに付け込んで、「母親代わり」と称して行われていた侵襲的介入を意味する。したがって、前者の学業向上を目的とした侵襲的介入とは異なり、日常生活の一部始終にわたってきめ細かく、しかも「母親的存在」としての要素が強かったために、その関わり方に粘着性、押し付けがましき、無用なおせっかいを見て取った。

### ③混合型侵襲的介入

このタイプは、祖母に代表されるように、学業とQOLの両者の向上を目的とした混合型の侵襲的介入である。このように記述すると、2重のベルトで締められたような閉塞感を感じるかもしれないが、学業で結果を出しさえすれば、日常生活における問題についての干渉は少なかった。ただし、学業が向上しなければ、日常生活におけるさまざまな問題は容赦なく叱責された。

## 3 男性性を保持するために編み出した、いたずら心を含んだ想像力

このような侵襲的介入の中でもっとも問題視したのは、寮母たちの関わり方である。つまり、「母親的存在」をベースに、善意と称してさまざまな場面でのおせっかいや押し付けがましいかかわりかたは、ともすれば子供である私たちにもたれかかるような息苦しささえ感じさせた。そのようなかかわり方に反発しながら、私は彼女たちの行動を次のような感性で見ていた。

私は子供のころから祖母によく牛乳を飲まされていた。その際祖母は、必ず牛乳を温め過ぎて、「膜」を張らしてしまった。ところが、私は牛乳の膜が大嫌いであったので、カップの中の牛乳の液体が半分以下になり、膜が舌に触った瞬間、途中で牛乳を飲むのを止めてしまった。すると祖母は、そんな私を叱責し、最後まで、つまり、牛乳の膜も含めて飲むように言った。ところがある日、例によってまた祖母に牛乳を飲まされたとき、下に沈んでいると思われるはずの膜が、この日に限って、カップの一番上に張り付くように張っていた。そこでまた、飲むのを躊躇していると、祖母から厳しく叱責され、やむなく一番上の膜を含め、牛乳を飲んでいった。

このような体験から、以下のようなことを考察した。すなわち、牛乳の膜の触感はねっとりしていて唇や舌にまとわり付くという性質から、母親的存在を前面に打ち出した寮母のかかわりを連想した。その牛乳の膜が、液体内に浮遊するように沈んでいるときは、寮母の怒りをやりすごしている自己を見て取ったり、「私はこれだけあなたのために思っているのに、なぜあなたはわからないの？」という台詞を重ねてみた。また、カップの上にはしっかりと張っているときは、「あなたたちのために守ってあげてるのよ。この子たちには私が必要なの」という寮母の勝ち誇ったメッセージを読み取った。さらに、牛乳を「温

め過ぎる」という行為においても注目してみた。「牛乳」という飲み物の性質を母性と位置づけ、その牛乳に負の感情や意味づけをすることによって、自己を納得させていた。特に、熱を加える（反発する）ことで、牛乳に含まれるたんぱく質（母性）が変質し、「膜」を生成するというプロセスを想像したり、その牛乳の膜の張り具合や液体内での膜の浮遊の仕方による母性のあり方を規定しようとするいたずらを含んだ想像力によって、なんとか彼女たちの母性から派生する怒りを楽しんでいた。

このような想像力を武器として用いることで、女子寮の中でもかろうじて男性性を保持したといえるだろう。その心性は、寮母をからかっている無邪気な少年と同じであり、唯一この行為が、女性の身体を否定し、男性のジェンダーを肯定する最良の方法であった。

#### 4 終わりに—「あなたの優しさが怖い」というメッセージ

『神田川』という歌の歌詞の中に、次のようなフレーズがある。

若かったあのこと、なにも怖くなかった、  
ただ、あなたの優しさが怖かった

このフレーズは、私が小学生のころから置かれていた「女性の園」の環境になじめなかったもっとも大きな理由であった。すなわち、女性の身体を持ちながら、ジェンダーが男であることで、女性たちから「優しくされる」という行為によって、男性性崩壊への危機を招き、代わって身体が女性であることで、彼女たちから女性への同一化を無条件に要求されていることへの怒りが、私を「優しさの恐怖」に陥れ、優しくされることを拒む結果になるのである。

そして現在でも私は、特に女性たちからの「優しさ」を、川に流すようにして拒み続けながら、男性性を維持しているのかもしれない。その「優しさ」を川に流してしまう前に、次のようなメッセージをどれだけ発信していくかが、今後の私の課題であろう。「私はあなたの優しさが怖い」。

(立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程)